

說文又云雲从雨云象雲回轉形釋名雲猶云云衆盛意也又言運也運行也呂氏春秋園道篇雲氣西行云々然冬夏不輟高誘注云運也周旋運布膚寸而合西行則雨也

〔段注說文解字〕

雨十一下雲山川氣也天降時雨山川出雲从雨云象回轉之形向上各本有雲字今刪古文祇作

半體象形之字矣云象回轉形此釋凡雲之屬皆从雲云古文省雨古文上無雨非省也二蓋上字象
下古文雲爲象形也王分切十三部
傳曰云旋也此其引伸之義也古多段云爲曰如詩云即詩曰是也亦段員爲云如景員維河箋云員
古文作云昏姻孔云本又作員聊樂我員本亦作云尙書云來衛包以前作員來小篆員字攷文作員
是云員古通用皆段借風雲字耳亦古文雲之所謂觸石而出膚寸而合也變之則爲云
自小篆別爲雲而二形迴判矣

〔類聚名義抄〕

雨七雲音云

〔萬葉集抄〕十八雲は山川の氣なりくもといふくは内へまくりいる詞もはむかふ義

〔日本釋名〕天上雲 仙覺が萬葉の註にくは内へまくりいる詞もはむかふ義篤信云此説うがて

りくもは上古の自語なるべし或くもると云意なるか但くもは母語にしてくもるは子語なるか

〔東雅〕天文雲クモ 古語にクといひし黒しといふ詞なるありクロといひクリといふは黒色也

暮をクルといひクレといひ暗をクラといふが如き皆是也萬葉集抄に日の暮るをクルとも
義いふ此雲蔽ひぬれば天暗きによりてクモといふなりクロといひクラといひクモといふ即

轉語なり又天陰をクモルといふは雲生るの謂也これは雲によりていひし所の語也

〔倭訓栞〕前編八くも 雲は隠るモの義なり雲は石より生ずよて雲根の名あり神代紀に雲氣もよ

めりくもおりかくるは雲下掛の義也雲のまがき雲のとざし雲のまがらみ雲のつゝみ雲のみ
を雲のうき波雲のは袖雲のあしなどは皆見たてたる詞なり

〔八雲御抄〕三上雲 ちら やへ やくもいづも むら うす うき かさ あま天清輔抄 あ

た よこ 曉山に あさ雲 とよはた万 あを万 にぬ万冬の山 あまひく あまのちら